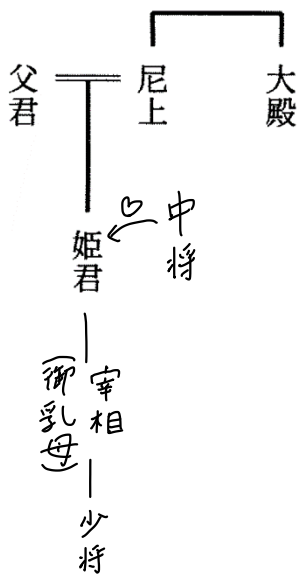


# 2016年『あきぎり』現代語訳

次の文章は、鎌倉時代成立とされる物語『あきぎり』の一節である。これを読んで、後の設問に答えよ。

なお、本文中の「宰相」は姫君の「御乳母」と同一人物であり、「少将」はその娘で、姫君の侍女である。



(尼上ハ) まことに限りとおぼえ給へば、御乳母を  
(尼上は) 本心に臨終だと思ひなされたので、  
乳母を

召して、「今は限りとおぼゆるに、この姫君の  
お呼び寄せになり、「今となつてはもう最期と思われると、  
この姫君の

ことのみ思ふを、アなからむあとにも、かまへて軽々  
ことだけ心配なので、  
(自分が) 亡くなった後にも、  
必ず(姫君を) 軽々しく

しからずもてなし奉れ。今は宰相よりほかは、誰を  
お世話し申し上げてはいけませんよ。  
今となつては(姫君は) 宰相(=乳母)の他は、誰を頼

か頼み給はむ。

りにしなされるでしょうか。いや、他の誰も頼りにはしなさないでしょう。

我なくなるとも、父君生きてましまさば、ちりとも  
たとえ私が亡くなつても、  
もし父君が生きていらつしゃつたならば、そうはいつでも(姫君は大丈

と心安かるべきに、誰に見譲るともなく、消えな  
夫だろつ) と安心できるに違いないのに、誰に世話を依頼するといふこともなくて、  
亡くなって

むのちのうしろめたさ」を返す返すも続けやり給は  
しまつような後の不安なこと(と)といったこと(を)を  
繰り返し繰り返し仰るもの、話し続けて最後まで

ず、御涙もとどめがたし。

仰ることが出来ず、涙もいひえぬのが難しい。

まして宰相はせきかねたる気色にて、しばしは  
まして乳母は涙をこみこめるのができないでいる様子で、  
じほうくは

ものも申さず。ややためらひて、「いかでおるか  
何も申し上げない。  
少し心を落ち着けて、「どうして（姫君のお世話が）いい加減になるでし

なるべき。いおはします時こそ、おのづから立ち去る  
ようか。いや、いい加減なお世話なんてしません。（尼上が）御存命の時には、たまたま（姫様のそばを）

ことも侍らめ、誰を頼みてか、かたときも世に  
離れることもあるでしょうけれども、誰を頼りとして、ちよつとの間でもこの世に生き続けなせることが

ながらへさせ給ふべき」とて、袖を顔に押し当て  
できるでしょうか。いや、私以外を頼りにして生きることはいけません」と言つて、袖を顔に押し当

て、たへがたげなり。姫君は、ましてただ同じさま  
てて、（涙を止めるのが）堪えがたそうである。姫君は（乳母にも）まして、ひたすら同じ（涙を止めるの

なるにも、かく嘆きをほのかに聞くにも、なほもの  
が堪えがたい）様子であるなかにも、このように嘆きをかすかに聞くにつけても、「まだ正気を保つて

のおぼゆるにやと、悲しさやらむかたなし。げに  
いるのだろうか」と、  
悲しさを晴らす方法はない。  
本当に、

ただ今は限りと思つて、念仏高声に申し給ひて、  
ただ今となってはもう最期だと思つて、  
念仏を声高く申し上げなさつて、（周囲の人が、尼上は）

眠り給ふにやと見るに、はや御息も絶えにけり。  
「眠りなれるのだろうか」と見ると、  
早くも息絶えてしまった。



姫は私だけが頼りだとおぼえています

念仏阿彌陀仏... 南無

極楽後生に生まれようよ 念仏を唱えろ

私はまだ正気を失ってはいないの？!

姫君は、ウただと同じさまにと、こがれ給へども、

(姫君は、(尼上と) ひたすら同じように(死んでしまいたい)と、思い焦がれなされるけれども、

かひなし。誰も心も心ならずながら、さてもある

どうしようもない。誰もが気が気でないけれども、

そのままの状態にいることも

べきことならねば、その御出で立ちし給ふにも、

できないので、  
その御葬送の準備をなされるにつけても、(姫君が)

われさきにと絶え入り絶え入りし給ふを、「何事も

「我が(尼上より)先に(死にたい)」と言って何度も気を失いなされるのを、(姫君の傍にいる人が)「何

しかるべき御ことこそましますらめ。消え果て給ひ

事も前世からの因縁がおりになるのだろう。

(尼上が) お亡くなりになって

ぬるは、いかがせむ」とて、またこの君の御あり

しまったのは、どうしようもない」と言いつて、

またこの姫君の様子を

さまを嘆きみたり。大殿もやうやうに申し慰め給へ

嘆いている。

大殿も様々に申し上げて(姫君を)慰めなされるけれども、

ども、生きてる人とも見え給はず。

(姫君は) 生きている人とも見えなさらぬ(ほど茫然としている)。



その夜、やがて阿弥陀の峰といふ所にをさめ  
その夜、そのまま阿弥陀の峰という所に(尼上の遺体を)埋葬し申し上げる。

奉る。むなしき煙と立ちのぼり給ひぬ。悲しとも、  
(尼上は)はかない煙となって立ち上りなされた。悲しいという言葉でも、

世の常なり。大殿は、ごまごまものなどのたまへる  
月並み過ぎて気持ち言い尽くせない。大殿は(尼上が生前に)細かくおっしゃったことが

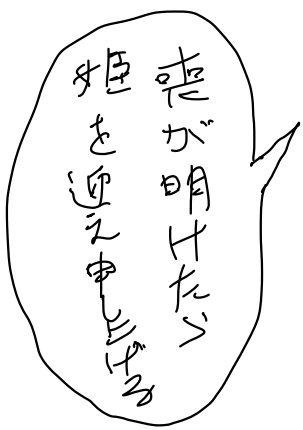
こと、夢のやうにおぼえて、姫君の御心地、さこそ  
夢のように思われて、姫君のお気持ちは、「さぞかし(悲しいだろう)」「

とおしはかられて、御乳母を召して、「かまへて  
(自然と推し量られて、)乳母を呼び寄せて、」必ず(姫君に何か)

申し慰め奉れ。御忌み離れなば、オやがて迎へ奉る  
申し上げて慰め申し上げなさい。喪が明けたら、すべて(姫君を)迎え申し上げ

べし。心ほそからでおはしませ」など、頼もしげに  
まじ。心細く思わぬのでらうじやない。」「なまじ、頼もしい様子で

のたまひおき、帰り給ひぬ。  
言い残しなされて、お帰りになつた。



中将は、かくと聞き給ひて、姫君の御嘆き思ひ  
中將は、「このよう(な事情)だ」と聞きなすつて、姫君のお嘆きを想像し、

やり、心苦しくて、鳥辺野の草とも、さうぞ思し

気の毒で、「『鳥辺野の草となって(自分も燃やされて)尼上と一緒に煙になりたい』」とも

嘆くらめと、あはれなり。

(思つて)、さぞかし嘆きなすつているだろう」と(思うと、中将も)しみじみとしらひ。

夜な夜なの通ひ路も、今はあるまじきこやと思す

「(自分が)毎晩(姫君の元に)通つていくことも、(喪中となった)今はもうできないのだろうか」と

ぞ、いづれの御嘆きにも劣らざりける。少将のもと

お思ひになると、どなたのお嘆きにも劣らない(ほど嘆く)のであった。少将(=姫君の侍女)のもとまで

まで、

(姫君宛の手紙を送った)、

よわ

カ鳥辺野の夜半の煙に立ちおくれ

(火葬地である)鳥辺野の夜更けの煙(となって空に上がる)尼上(に取り残されて、

さうぞは君が悲しかるらめ

さぞかしあなたが悲しんでいるんですよ。

とあれども、キ御覧じだに入れねば、かひなくてうち

と書いてあるけれども、

(姫君は)目をとめることさえなすらないので、

(少将は)どうしようもなくて

置きたり。

(手紙を)置いておいた。

